



Title	＜紹介＞佐藤明浩著『院政期和歌文学の基層と周縁』
Author(s)	黄, 夢鴿
Citation	語文. 2020, 115, p. 77-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88514
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

佐藤明浩著『院政期和歌文学の基層と周縁』

黄 夢 鶴

本書は院政期に作られた和歌作品や歌論などを中心に、和歌の実態及び往時の人々の和歌に対する認識を論じるものである。以下、本書の構成を掲げる。

序章

I部 和歌作品と歌学・歌論と

第一章「はす」を詠む和歌／第二章 源俊頼の歌学知識と和歌実作／第三章 行尊の和歌表現―地名詠と擬人法と―／第四章『為忠家両度百首』に関する考察／第五章『久安百首』と歌学―詠歌の場としての定数歌―／第六章『久安百首』部類本考／第七章『久安百首』部類本と『千載和歌集』の配列構成／第八章『御裳濯河歌合』の構成と俊成入道の判／第九章 藤原俊成の和歌史観と批評態度／第十章「かはやしろ」の論争をめぐって／第十一章 定家『八代抄』夏部の配列構成をめぐって

II部 和歌のことば

第十二章 稲の名を詠む歌／第十三章 稲の名を詠む源俊頼の和歌／第十四章 藤原清輔の「ながひこ」詠をめぐって／第十五章『和歌初学抄』物名「稲」の窓から／第十六章 歌語「ありそ」「あらひそ」考／第十七章 官職名を詠む和歌／第十八章「かげなびく」考―大臣在任を表す歌ことば―

III部「古歌」「本歌」をめぐって

第十九章「近頃の歌」との類似をめぐって―歌合判詞にみる認識―／第二十章 歌合判詞における「古歌なり」をめぐって／第二十一章 歌合に古歌を詠むこと／第二十二章「古歌」の再生ということ／第二十三章 藤原家隆の先行歌撰取／第二十四章「さののわたり」の遠景―本歌取りへの一視角―／第二十五章『新古今和歌集』の「里はあれて」歌「玉の緒よ」歌考
終章・初出一覧・索引・あとがき

本書は三つの部に分けられている。I部では、源俊頼の和歌や『為忠家両度百首』、『久安百首』、藤原定家編『八代抄』などの作品、源俊頼や藤原俊成などの歌論・歌学の言説を取り上げ、和歌の実態と歌論との関連、及び百首歌と歌集の編纂の具体相と特徴を明確にしている。II部では、和歌の実例や歌学書の記載などを用い、稲の品種名や官職名などの珍しい表現の実態、またそれらがどのように和歌表現を構成する要素になったのかを考察している。III部では、まず「古歌」のありようを分析し、往時の人々の「古歌」の捉え方を探り出している。更に「本歌」の用い方について検討し、和歌に対する認識と解釈を、当時の人々の和歌鑑賞の方法に沿って考究している。和歌の「基層」と「周縁」との両面から論じる本書は、和歌の解釈や和歌作品とその周辺の諸資料との関係を考える際に多くの示唆を与えてくれる一冊である。

(和泉書院、二〇二〇年二月、五九八頁、一六、〇〇〇円＋税)

(ことう・むこう 本学大学院博士後期課程)